

感謝箱献金だより

## ガリラヤのほとり 43 号

## 「教会の鐘を鳴らすのは誰？」

しかし、イエスは言われた。

「子どもたちをそのままにしておきなさい。私のところに来るのを妨げてはならない。天の国はこのような者たちのものである」。

マタイによる福音書 19 : 14



大阪教区主教  
アンデレ 磯 晴久

主イエスは暗闇を照らす光として、私たちの間にお生まれになりました。今世界は闇が深まっているように感じますが、神さまは主イエスの光に照らされて、私たちが恐れずに歩むように、そして、神さまは私たちが、主イエスの光を反射して、闇を照らす小さな光となるようにと願っておられます。

レイモンド・M・オールデン原作『クリスマスのかね』（文/竹下文子 絵/山田花菜「クリスマスのかね」教育画劇 2021 年。原題は「鐘はなぜ鳴ったのか」というお話（絵本）があります。

“昔、昔、ある所に教会があって、その横に高い塔が立っていました。その塔のてっぺんには鐘がつるされていました。何百年も前、この教会が建てられた時から鐘はあったのですが、この鐘の音を聞いた人はいませんでした。

毎年クリスマス・イブには人々が集まり、主イエスのお誕生を祝って、贈り物をささげました。その中で、一番すばらしい贈り物が置かれた時、クリスマスの鐘はひとりでに鳴りだすと言われていました。しかし、どんなりっぱな贈り物をしようとも、鐘は鳴りません。

さて、教会からずっと離れた小さな村にペドロと小さな弟アンドレという兄弟がおりました。兄弟は相談し、遠いけれどクリスマス・イブには、教会に行くことを決めました。その年のクリスマス・イブの日、粉雪が舞う寒い夜でした。二人はしっかり手をつないで歩きました。

教会のある町に入ると、雪の中に女の人が倒れていました。ペドロは、「どうしたの。こんな所で眠っちゃダメ。」ゆすったり、こすったりしましたが、ぐったりと目をつぶったままです。ペドロはアンドレに言いました。「おまえ、一人で教会に行っておいで。」弟は言います。「いやだよ。僕もここにいるよ。」ペドロは、「それじゃ、二人ともお祈りができないだろ。

僕がこの人を見ているから。二人分のお祈りをしてきて。そうだ、ここに銀貨がある。これをイエスさまの贈り物にそっとお献げしてきてくれる？お祈りが終わったら、誰か大人の人を連れてきて。それまで僕がなんとかするから。」小さな弟は怖かったのですが、勇気を出して教会へ向かいました。ペドロの目にも涙が溢れました。教会へ行きたかったし、本当は心細かったのです。ペドロは必死に女の人の体をさすりました。

小さなアンドレは、教会にたどり着きました。沢山の人が、プレゼントを捧げています。王様も、皆が驚くような大きな宝石の付いた王冠を捧げています。でも鐘は鳴りません。イブ礼拝の終わりの聖歌を歌おうとした時、突然オルガンがびたりと弾くのをやめました。司祭さんが片手をあげて、「静かに」と合図したのです。人々は耳を澄ましました。聴こえたのです。クリスマスの鐘の音が。誰も聞いたことがない、やさしく、美しい音色でした。皆、見つめました。誰がどんなプレゼントをしたのか。そこにいたのは、小さな男子、そうです、小さなアンドレが、1 枚の銀貨をそっとささげ、そして、ちょこんと座ってお祈りしていたのです。もちろん倒れていた女の人も助けられましたとさ”

と言うお話です。

イエスは言われた。「子どもたちをそのままにしておきなさい。私のところに来るのを妨げてはならない。天の国はこのような者たちのものである。」

神さまは、ペドロの女の人を助けようと寄り添う愛の心と、小さなアンドレの捧げものと、二人分の勇気とお祈り、そして、クリスマス・イヴ礼拝に行こうという二人の小さな兄弟の計画を、大変喜ばれたので、鐘が鳴ったのです。

私たちもこの小さな兄弟の姿に倣いましょう。光の源なる主イエスに照らされて、私たちも小さな灯を、暗闇に灯す人となりましょう。日本聖公会婦人会感謝箱献金の底流には、この小さな兄弟の心と祈りが流れています。主に感謝。

## お献げ先から

### リグリマ・ジャパン

上澤伸子

2024 年は現地の活動に影響を与える 2 つの予期せぬ出来事がありました。

1 つ目は、8 月にバングラデシュの政治状況が急変したことです。ハシナ前首相の率いるアワミ政権が崩壊したのち、グラミン銀行総裁でありノーベル平和賞受賞者であるムハンマド・ユヌス氏が首席顧問として暫定政権を率いています。ユヌス氏は、次期総選挙を 2025 年末から 2026 年半ばまでに実施できる見込みだと表明していますが、現在のところ、さまざまな地域で暴力を伴う小競り合いが続いています。そのため、現地リグリマの活動が一時期、制限され、現在も移動やイベント開催にリスクが伴う状態のようです。

2 つ目は、10 月にリグリマ・メンバーの住む北部地域が、季節外れの大規模な洪水に見舞われたことです。そのため、稲刈り前のすべての田んぼや、生活に不可欠な池が水没し、現地リグリマでは冬季米の苗を緊急配布しました。



また、ガロ・バプテスト教団が設立した、北部地域の医療拠点であるジョイラムクラ・クリスチャン病院が壊滅的な被害を受けました。この病院は感謝箱献金のお献げ先であるワンタイムが医療協力をしている病院です。昨年、10 月 9 日に現地ディレクターのラブリーさんからバングラデシュ北部のガロ族居住地域で、大規模な洪水に見舞われていると連絡がありました。わたしもこの病院には度々訪れていますが、地域の人びとの医療を支えている医療機関で、ガロの人びとによって運営されています。

この地域ではあまり洪水が起きたことはないのですが、いかに今年の洪水が大規模であることを示していると思います。

#### ワンタイムの活動に参加された医師からのメッセージ

「こちらでも心配していますが、現地からの連絡や救助依頼は特にありません。今回に限らず、バングラデシュで洪水は度々起こっており、その都度、多くの方々の命が危機にさらされています。どうぞお祈りください」。

## サイティア・フラハ 代表 荒川勝巳

毎年、多額のご寄付をいただき、ありがとうございます。この円安のおりとても助かります。

いま児童養護施設には 11 名の女子たちが在籍しています。小学生 4 名、中学生 1 名、高校生 5 名、訓練学校生 1 名、合計 11 名です（2024 年 1 月現在）。このように中学生以上の年頃の子どもたちが 8 名になり、授業料もかかるようになってきています。それだけに子どもたちをケアしている寮母さん、ソーシャルワーカー、夜警などへの給料も上げないといけないのですが、「いまはケニア中が不景気なので我慢してください」と訴えて抑えています。皆さまよりいただいたご寄付はそれらの費用の一部に使わせていただきました。

こちらはコロナによる被害は無くなったものの、世界での戦争などによる混乱のために相変わらずインフレがひどいです。それに円安が昨年同様に続いているので、こちらの財源難も続いています。

昨年は、ボランティアインターンの活動を始めて、財源を少々カバーすることができました。この活動は日本から多くの方たちにボランティアで来ていただき、ボランティア料としての収入になるだけでなく、学校児童の教育向上にも貢献しています。多くのボランティアさんはほとんどが若者で、ボランティアの体験を積んでいただいたり異文化交流もするので、そういう方達の社会観を深める役にも立っています。



### 〔2025 年度に計画している活動〕

今居る施設の子どもたちが成長してきていて、高校やトレーニングセンターへと進んできています。それで費用をそちらの方へまわしたり、この深刻な不況で生活できにくい子どもが増えているので、そういう子どもたちを今後も私たちの学校に無料で受け入れるようにしたいと思います。

学校の方は、この不景気が続いています。私たちの学校は他の私立の学校と比べ授業料が安いのと、先生たちの児童への教え方がよいのと、ボランティアインターンの方たちのいろいろな授業によって、児童たちは学習意欲を高めています。それで昨年からは児童が増え出していましたが、今年の 1 月時点でも児童が増加しています。



書道、きものを紹介するボランティアインターン

## NPO 法人 ワンタイム 司祭 大和孝明

2024 年 4 月 27 日から 5 月 5 日にかけて、バングラデシュのジョイラムクラ・クリスチャン・ヘルス病院に、口腔外科歯科医・整形外科医・形成外科医の 3 名を派遣しました。外来での診察件数は 224 件、手術数は 58 例でした。バングラデシュには熱波警報が出ており、気温が 40℃になった日がありました。医師も体調管理に気を付けながら診療にあたりました。前回より診察も手術も患者が増えていて、ワンタイムの活動が認識されてきている印象があったとのことでした。

また近隣でも手術できる病院が増え、他の医療ボランティア団体が入ってきているなど、次第に現地の医療状況全体も改善してきているとのことでした。2025 年も時期は未定ですが、ジョイラムクラ・クリスチャン・ヘルス病院に医師の派遣を予定しています。

## 地域支援団体 釜石支援センター望 代表 海老原祐治



例年通り復興住宅や被災地域でのコミュニティ形成支援を行った。月一回のサロン実施を中心に手芸などを行いながら住民の集まる機会を作った。助成された献金は主に、手芸などの材料費、茶菓子、ポスターチラシ製作費などに使用した。

目的としていたコロナ禍を経て傷ついたコミュニティの再生と、被災者に寄り添うことは充分できたと考えている。また個別の相談援助業務や介護予防業務も成果があったと思っている。

2025 年度もサロンを中心としたコミュニティ形成支援を計画している。コミュニティ形成、生きがい居場所作り、介護予防、社会参加などを視野に入れ、コミュニティの拡大を目指し、共助の土台をつよくすることを目指していきたい。



高齢化により参加者は減少傾向にあるが、各所で新規の参加者も現れている。このような新規の参加者を積極的に取り入れることを目標としたい。

大町・大渡グループ(大町5号)「松ぼっくりツリー作り&お茶っこ」

## 国際子ども学校 ELCC 主事 谷景子

中部教区名古屋学生青年センターが運営する国際子ども学校（以下 ELCC）は、さまざまな理由で地域の学校や幼稚園等に通うことができないフィリピンにルーツをもつ子どもたちのための学校として活動しています。地域の学校に合わせて 4 月より年度が始まり 3 学期制、毎週月曜日から金曜日、1 日 5 時限、授業を行っています。対象は幼稚園から高校生年齢で、幼稚園、小学、中学生、高校生の 4 クラスに分け、年齢やその必要に合わせて、日本語、算数、社会、図工等の授業を行っています。また、通常の授業に加えて、春と秋に遠足、夏にプール、スポーツフェスティバル（運動会）👍 やクリスマス会、卒業・修了式などの行事も行っています。近年は、日本で働く親の元に呼び寄せられて来日した子どもが、日本語を学びながら日本の習慣に慣れる等、地域の学校や社会に出ていくまでの準備の場としての役割が大きくなってきています。



2024 年 3 月末の在籍数は 21 名でした。そのうち 11 名が卒業・修了し、4 月から 7 名が地域の小・中学校に入学・編入し、4 名は就職（含、アルバイト）して地域社会へと旅立っていきました。また、2024 年 4 月から 12 月末までは 21 名が在籍。家庭の事情により途中で ELCC に通えなくなった子やフィリピンに帰国した子もいますが、1 月現在、19 名が通って来ています。そのうち高校生に当たる年齢の子ども 8 名が高校入学を目指しています。2 月の入学試験に向け、1 月より週に 2 回、放課後にも授業を行い試験勉強に励んでいます。またその他に 6 名が 4 月から地域の小・中学校への入学・編入を予定しており、準備を進めています。



## アトウトウミャンマー 「ミャンマーを覚える祈り会」に参加して



軍事クーデターから 4 年、ミャンマーでは国軍による攻撃が続いています。爆撃で家を焼かれた人々は避難生活を強いられています。ある教会では一時的な避難場所を用意し、食事や生活の必需品などを提供しています。

18～35 歳の若者には男女とも徴兵制度があり、最近、強化されています。

また、日本には、これまでも技能実習生・留学生としてミャンマーから来日し学ぶ若者は多くいたが、最近急増し、帰国が困難のため、留まっている人も多くいます。そのため、アトウトウミャンマーでは顔と顔とが見える小



規模な支援をしています。それは、Atutu（ともに、いっしょにの意）という思いです。

### 1 月から「アトウトウランチミッション」開始!

タイのメーソッドにはミャンマーから避難してきた家族が多く住んでおり、子どもたちのための学校もあります。アトウトウミャンマーは、ここで学ぶ子どもたち 163 人分の給食を週に 2 回、支援。1 回分の材料費 5000 円を 1 口として支援を呼びかけています。子どもたちが安心して学び、みんなで給食を食べます。作ってくれるのはお母さんたち。

「今日の食事は〇〇さんから」と子どもたちに伝えます。個人やグループでも参加できます。すべての活動の中心は、「ミャンマーを覚える祈り会」です。ホームページをごらんください。（井田）

## RITA-Congo リタ-コンゴ

### 本の紹介

#### 『ムクウェゲ医師、平和への闘い』

「女性にとって世界最悪の場所」と私たち

執筆者：立山芽以子・華井和代・八木亜紀子

岩波ジュニア新書 880 円

2024 年もコンゴ民主共和国の「ムクウェゲ医師の社会啓発活動の支援」のために NPO 法人 RITA-Congo を通じて、感謝箱献金をお献げしました。

昨年出版された岩波ジュニア新書『ムクウェゲ医師、平和への闘い』をご紹介します。

この本は、「なぜ、豊かな資源に恵まれた国、コンゴの女性たちが、性的暴力の被害に遭い続けなければならないのか？」その理由について 10 代の子どもたちにもわかりやすい言葉で書かれています。



アフリカのコンゴ民主共和国東部地域では、自動車のバッテリーやスマホ・ゲーム機などに使われる半導体に必要なレアメタル（希少鉱物）が多く産出されます。そのレアメタルが紛争の資金源として利用され、鉱山の周辺に暮らす住民たちが政府軍や武装勢力の兵士から、暴力を振るわれる原因となっています。その暴力の中に女性への性的暴力があります。相手の尊厳を傷つけ、恐怖心を与えることで、土地の権利を奪うことが日常化しています。

ムクウェゲ医師はこれ以上、女性たちが性的暴力の被害で苦しむことがないように、埋蔵資源の正しい取引ルール作りを世界に呼びかけるなどの啓発活動を行っています。

この本は実際にムクウェゲ医師と出会った 3 人の日本人女性によって書かれています。実際に被害に遭った女性たちへのインタビュー記事では、痛みは消えることがないけれど、パンジ病院でムクウェゲ医師と出会い、心と身体の治療を受けて社会復帰をする女性たちの、新しい人生を歩み出す姿に心が熱くなりました。ぜひ、お読みください。

RITA-Congo のホームページには、この問題を解決するための働きが紹介されています。



## 「今、気になっていること」

いっしょに、話してみませんか！



### ○地球の温暖化や気候変動、地震や洪水などの災害

大切な人の命を護るために日頃の備えを。身近な体験者の話を聞く。

### ○戦争や難民問題

「まさか？」と、思っているうちに始まる戦争、止めることが難しい。

### ○戦後 80 年を迎えた日本

アジアの国々を侵略した加害国であったこと。

「二度と戦争はしない」と憲法で定めたことを忘れない。

### ○日本聖公会婦人会の活動目的は

「まことの平和をつくりだすこと。

感謝箱献金「日々の感謝と祈りの献金」は平和をこの世界に実現する活動。

# コア チャプレン からのメッセージ

司祭 アントニオ出口 崇 (京都教区 下鴨基督教会)



## モチベーション

「モチベーション」動機、行動を引き起こす要因 なぜ自分がこんなことをしなければならないのか。仕事であったり人間関係であったり、モチベーションが曖昧になると、その場にいることがしんどくなり、あまり良い状態とは言えなくなります。生きるということも普段はあまり考えないのかもしれませんが、モチベーションも大きく関わっていることと思います。

以前、私が関わっている幼稚園の横の繋がりでも過ごしていました。

しかし、一緒にその任に当たった他の園の先輩方は、私以上に大変な役割を担っておられたのですが、楽しみながらニコニコされていました。

ある時生意気にも、その先輩方に「この仕事のモチベーションは何ですか？」と聞いたところ、しばらく考えておられましたが、「こうやって一緒に呑むことですよ！」と答えられました。

私という人間の小ささと、やる気の無さを恥ずかしく振り返りますが、私自身も「モチベーションは？」と聞かれて答えることが出来るか、仕事、家庭、教会、社会での様々な役割を私たち一人ひとりが担っていますが、すべての行動にモチベーションを意識していません。

自分自身も惰性で、深く考えずに動くこと、そうしなければやってられないことが多いことに、あらためて気づかされました。

考える間もなく日々を過ごしていき、ふとした時を大切に思える、「この瞬間があるから何とか進むうか」神様はそんな出会いをたくさん私たちに用意してくださっていますが、気付くのはほんの一握りです。

私たち一人ひとり、そして私たちに関わっている働きをされている方々に、「この瞬間」が豊かに与えられますように。

※原稿提出が遅いのは「モチベーション」ではなく「能力」の問題です。。いつもありがとうございます。



## 感謝箱献金のいのり

● 神さま、今日もみ恵みの中で生かされていることを感謝いたします。

● イエスさまはいつも、悲しんでいる人、苦しんでいる人と共に歩まれました。

● 私たちにもそのイエスさまの歩みに倣（なら）う心をお与えください。

● 私たちのこの献げものが、最も助けを必要としている人々のために用いられますように。また、この人々との交わりを通して共に生きるものとならせてください。

● 主イエス・キリストのみ名によって アーメン

## 感謝箱とわたし



## 聖職候補生

ステラ・ミシェル 大倉有紀



## プロフィール

出身教会：川口基督教会

経 歴：関西学院大学神学部卒。  
同大学博士課程後期課程単位取得満期退学  
桃山学院中学校高等学校 宗教科教員  
高槻聖マリヤ教会勤務

趣 味：登山と海外旅行でしたが、今はあまり遠出できないので、料理と時々着物を着て出かけるのを楽しみにしています。チャントや聖歌を歌うのも大好きです。中高で合唱部の顧問をしていました。

主の平和 日本聖公会婦人会の皆様、いつもお祈りに加えていただきありがとうございます。

昨年 4 月に高槻聖マリヤ教会に派遣され、八ヶ月が経ちました。私も家族も新しい教会にすっかり慣れて、元気に過ごしています。

私たちの教会では、感謝箱献金を聖堂入り口横の子どもの部屋の前に置いています。虹の模様が描かれた小さな可愛い献金箱は、子どもの手にぴったりのサイズで、時々子どもたちが持ち歩いていたり、重ねて積み木のように遊んでいる姿を見かけます。（大事に扱うように声をかけて、その後ちゃんと元の場所に戻します）

この少子化の時代に子どもたちが教会に来てくれることを嬉しく思い、また感謝の気持ちを抱きます。そして同時に、世界中の子どもたちがこのように笑顔で、安心して過ごせる場所にいて欲しいと心から願います。

感謝には大きな力が込められているように感じます。「ありがとう」という言葉には“うれしい”“幸せ”な温かい気持ちが一緒にあって、その温かさを誰かに分け合いたい、分かち合いたいという願いが生まれます。感謝を何かの形にすることで、この願いも形にすることが叶います。感謝箱献金が、こうして子どもたちや社会の中で弱くされている人々を支えるために使われているということに、私は、感謝箱献金にかかわる一人ひとりの祈りと神様の祝福が大きな力として働いているのだと、感じています。

感謝を形にする、見えるものにする、というのは私たちがイエス・キリストに教えられている生き方であると思います。これからも感謝箱献金の働きが続いていくことを心から願い、お祈りしています。

## 編集後記

ある番組でスマトラ地震での震源地に一番近い島が、一番被害の少なかった話がありました。それは過去の大きな被害を忘れないようにと歌にして日頃から口ずさんでいるから冷静になれたといます。伝えていくことの大切さを改めて思いました。ガリラヤのほとりに読まれた方は、いつも同じところに献金しているのではと感じられるかと思いますが、私たちの支援しているところを伝えていく・覚えていただく意味では私は大事なことと考え、活動できればと思います

(中尾由紀子)



日本聖公会婦人会感謝箱献金事務局

〒520-2331

滋賀県野洲市小篠原 847-6

井田涼子方

TEL/FAX 077-599-3728

Email [suzuko@da2.so-net.ne.jp](mailto:suzuko@da2.so-net.ne.jp)